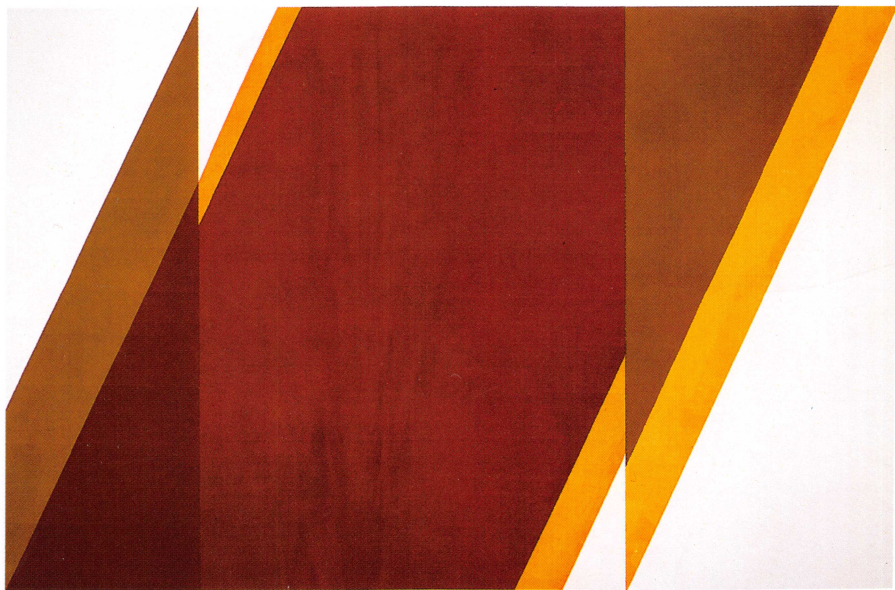
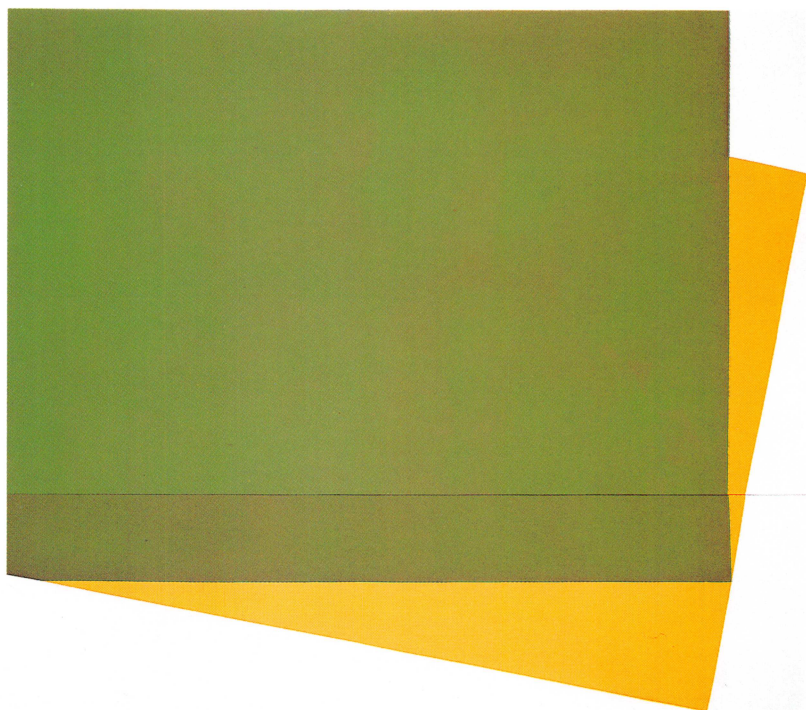


# 白い空間に

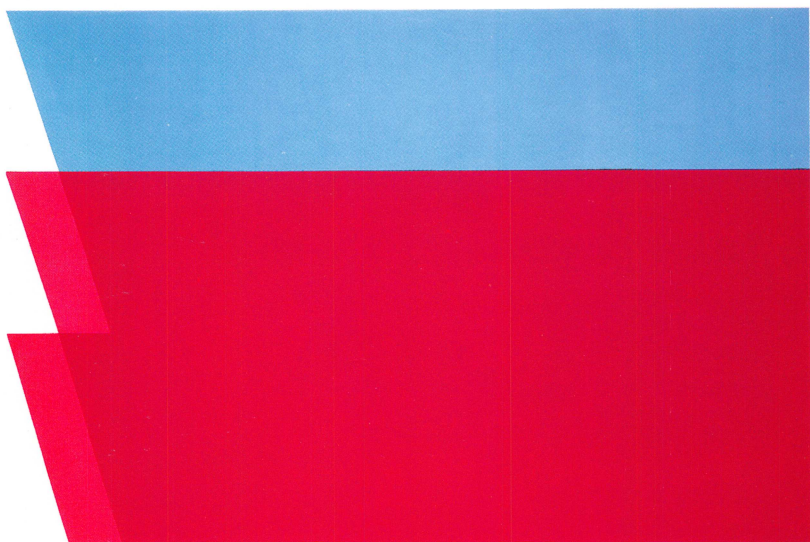
横井 敏秀



(150×230)

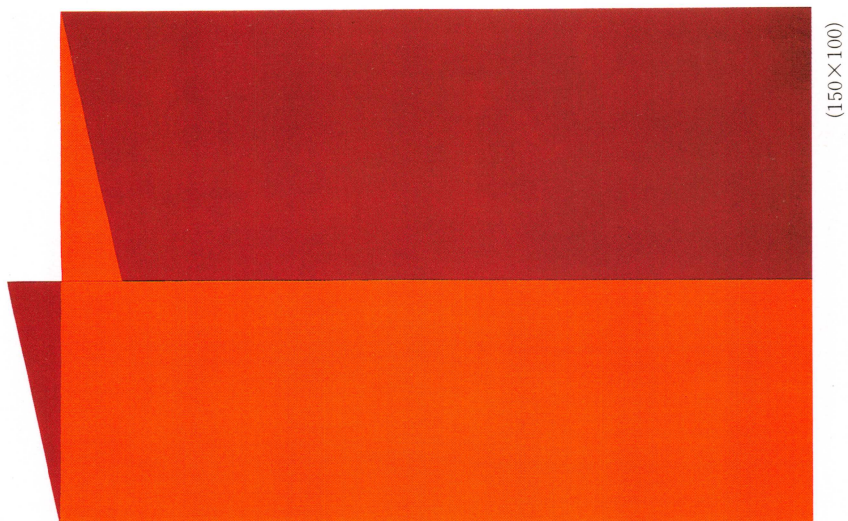


(150×130)

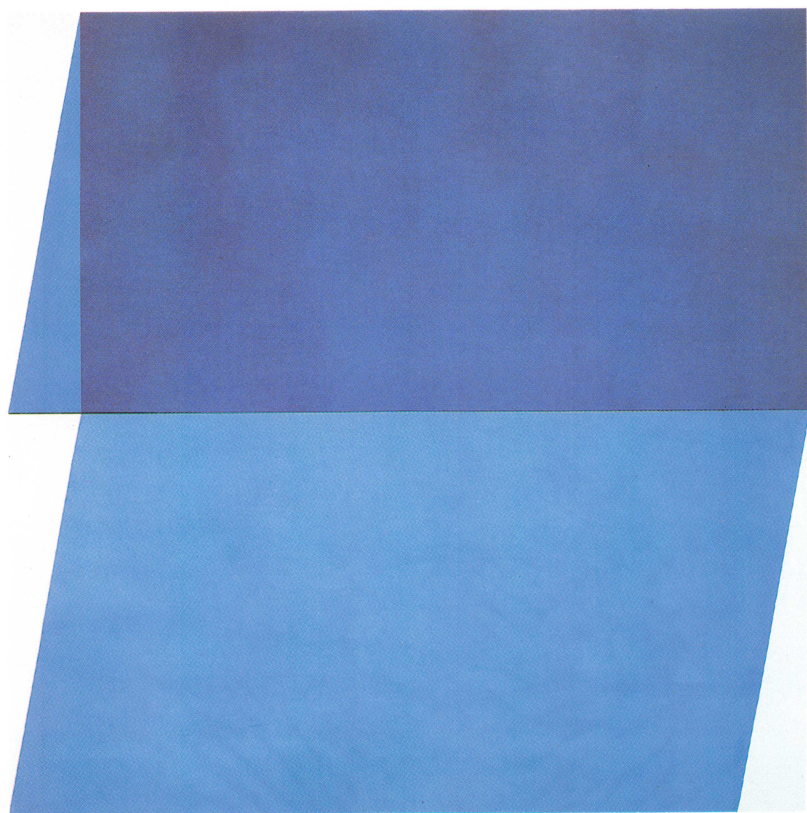


(150×100)

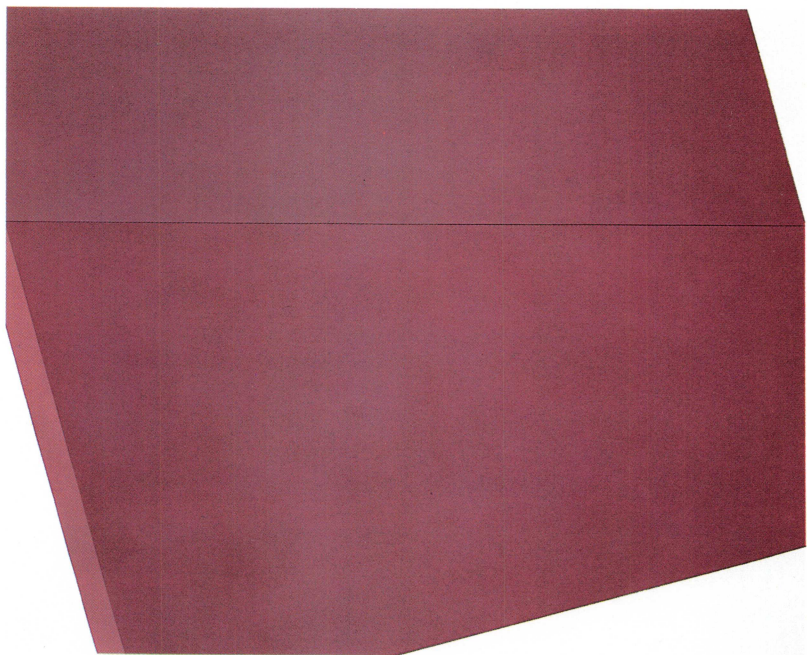




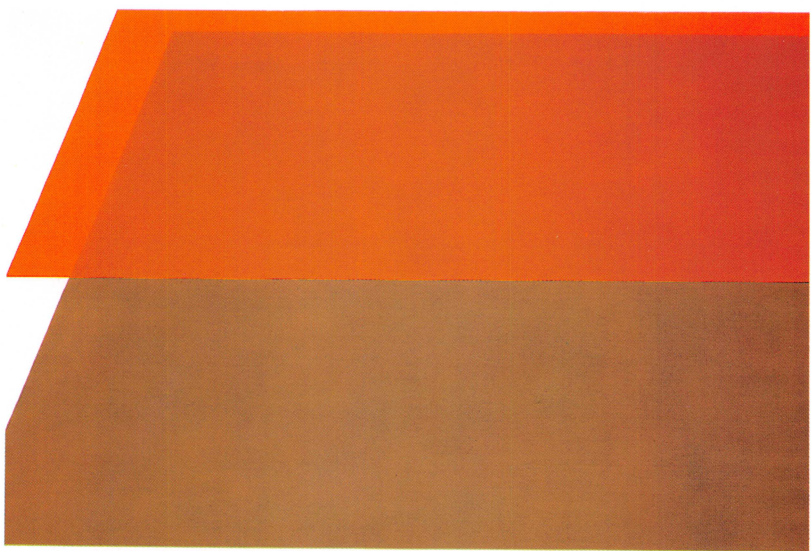
(150×100)



(150×150)



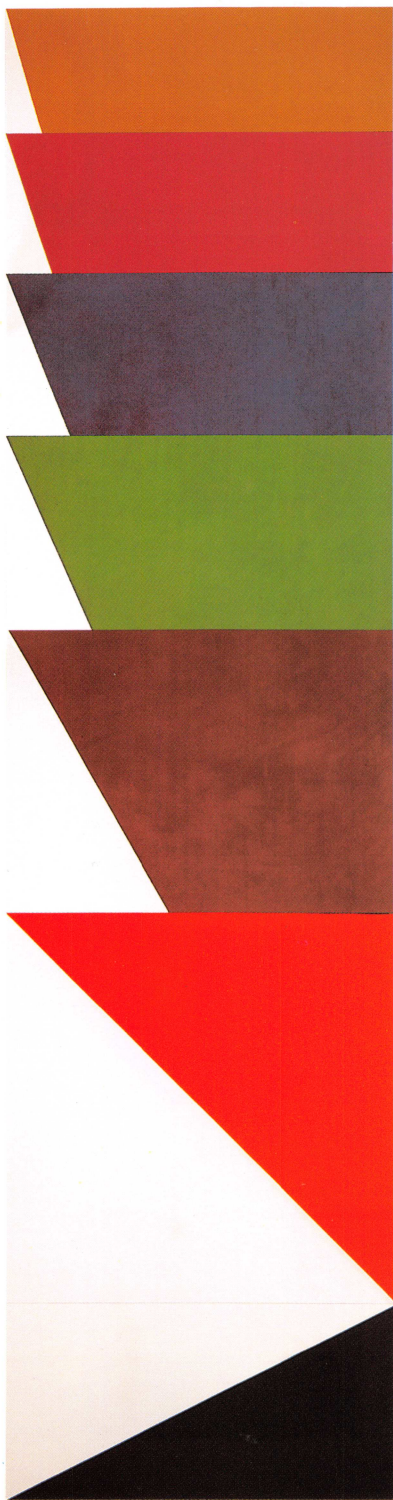
(150×120)



(150×100)



(150×534)



## 白い空間に

横井 敏秀

構成要素として、画面上に取り込んだ様々な形態が、すべて直線を基本に組立てられていること。そしてその直線が、色と色との境界線として明確に機能する必要があること。

配色の相関性における色の対比とその変化。更に色の面積比との関わりで、どうしても残しておきたい白場の空間としての効果、等々作品を具現させるための諸要素も、「染料と布」という関係の中では、これらはすべて二次的なものであり、素材に対しては全く体積を持たずに、静かに広がる染料の色面こそが、色彩そのものを無機的、空間的に存在させることであり、均質化され、平面化されたテクスチャーを表出させることが、自身の「染色」である。